

短期で行う留学生向けの書写・書道体験の授業実践分析

伊藤 雅 一*

(2023年10月23日受理)

Classroom Practice Analysis of Short-term Japanese Calligraphy Experience for
International Students

Masakazu ITO

キーワード：書写・書道体験，書道文化，書字技術，多文化理解

本稿は、留学生向けの書写・書道体験の授業実践を実施、検討し、成果と課題を示すための論考である。具体的には、1回の書写・書道体験という限られた機会のなかで、説明や体験をどのような要素で構成するのか、その構成に基づく授業内容が受講者にどの程度伝わっているのかについて、授業当日の受講者の作品や、授業実践前後のアンケートから検討していく。先行実践をふまえて、授業実践の目的を（1）書写・書道の体験を通して、書字技術を向上する、（2）書写・書道文化の知識（歴史や芸術）を通して、日本文化理解を深める、（3）書写・書道の観点から書いた作品を鑑賞することで、文字や芸術の認識を広げる、の3点にしぼり、書写・書道の書字体験、書写・書道の文化理解、書写・書道の鑑賞の3つの要素で授業を構成した。授業実践の結果、毛筆による書字技術の向上、毛筆に限らない日本語の書字技術の変化認識が半数程度確認できた。日本文化理解については、6割以上の受講者が深まった認識を持ったことが確認できた。文字や芸術の認識を広げる点は、短期の実践では抽象度が高く難しいと予想していたなか、約3割の受講者が俯瞰的な視点を持ったことが確認できた。本稿によって、多文化共生や多文化理解における書写・書道教育研究に対して、一事例を提供できた。

はじめに

本稿は、留学生向けの書写・書道体験の授業実践を実施、検討し、成果と課題を示すための論考である。具体的には、1回の書写・書道体験という限られた機会のなかで、説明や体験をどのような要素で構成するのか、その構成に基づく授業内容が受講者にどの程度伝わっているのかについて、授業当日の受講者の作品や、授業実践前後のアンケートから検討していく。多文化共生や多文化理

*茨城大学全学教育機構

解における書写・書道教育研究への一助となることを目指す。

I 先行実践の検討

留学生向けの書写・書道体験について扱った実践研究を概観していくと、大別して長期の実践と短期の実践がある。長期の実践に取り組んだ福光(2020)は、日常の日本語を書く文字を美しくする実用書、芸術作品を制作する芸術書、書道作品の鑑賞や書道史に関する書道史・書道理論、書道に関連する文学・漢字学や日本文化論といった、4つの観点を挙げている。そして、留学生が漢字文化圏の出身であるかどうかによる差などに考慮しつつ、4つの観点を網羅的に15回の授業で展開し、古典を手本とする臨書や紙面の大きな大作に取り組んだ様子、留学生の中には帰国後も書写・書道活動を継続している様子などを取り上げている。

馬場(2021)は、「書道は、世界で唯一漢字をモチーフとした芸術である。また視覚芸術であると同時に、表現自体が文字として意味を持つ芸術でもある。それゆえに、例えば漢字をモチーフにした作品制作を行うならば、漢字そのものが持つ意味を理解し、より深い造形作品へと昇華させて欲しいと考える」と述べ、オンライン授業の不自由のなか、音韻や部首など漢字の成り立ちを深く理解する授業を15回の授業で展開し、受講者が漢字を構成要素から理解するに至っている。

こうした長期の実践例は、本稿における短期の実践で取り組むには限界があるものの、実用書の要素が強い書写、芸術書の要素が強い書道、文化としての書写・書道、文字としての漢字理解といった観点をふまえる必要性を提示している。

短期の実践に取り組んだ例として、林(2017)は、1回2時間の授業実践を「毛筆で書くことと書字能力の向上の関連」「書表現の文字性と造形性の捉え方」に観点をしぼって実践と分析を行っている。前者の観点は、練習した漢字を1枚しかないカレンダーに書き込む活動を通して分析し、後者の観点は、日本の現代書家の書を鑑賞するアンケートを通して分析している。短期の実践においては、このように観点の構成や実践内容を限定することで、書字能力に関わる活動や書道鑑賞を含むなど複数の要素を取り入れた実践例がある。

以上の授業実践から見出された知見と、書写・書道研究の動向をふまえて提示された押木(2016)の書写・書道教育による学力の目指す方向性「コミュニケーション力(目的・相手意識)」「多様性(自分の字に自信をもてる、他の人の字を認められる)」「リテラシィ(読みやすく書ける、書きやすく書ける)」「文化・伝統」をふまえて、今回の授業実践の目的を以下の3点にしぼった。

- (1) 書写・書道の体験を通して、書字技術を向上する。
- (2) 書写・書道文化の知識(歴史や芸術)を通して、日本文化理解を深める。
- (3) 書写・書道の観点から書いた作品を鑑賞することで、文字や芸術の認識を広げる。

具体的に授業内容と照らし合わせると、自由課題の選択とそれを書いた作品の発表が「コミュニケーション力」(主に目的(3))、自由課題への書写・書道両面からのコメントが「多様性」(主に目的(3))、共通課題「永」を通じた活動が「リテラシィ」(主に目的(1))、中国や日本における

書写・書道史の講義が「文化・伝統」(主に目的(2))にあたると思われる。なお、留学生が毛筆で書字する場合、外国語としての不慣れな日本語を実用書の要素が強い書写として書字することが中心となる(共通課題「永」に関わる時間が長くなる)と考えた。このとき、押木(2017)が「書写は画一化を目指すわけではなく、多様性をみとめるものであり、それは手書きによる文字の文化や伝統の継承といえるだろう」と指摘しているように、強く画一化を求める(止め、はらい、はね等の点画を厳格に求める)ことのないように留意した。

II 授業実践の方法・過程・結果

1 授業概要と授業当日までの準備

今回の授業実践は、留学生向けに開講されている「日本体験学習A」という授業の連続2校時(3時間)を書写・書道体験に割り振って実施された。「日本体験学習A」は、英語による授業実施の英語コース(11人)、日本語による授業実施の日本語コース(10人)に分けられているため、コースごとに授業を実施した。授業資料は、基本的に英語で作成し、英語コースでは英語で、日本語コースは日本語で発話した。細かいニュアンスの違いや、場面に応じた英語表現の補足については、「日本体験学習A」担当教員から英語でサポートしてもらうこととした。

書写・書道体験は、「日本体験学習A」において過去にも実施したことがあり、そのときに茨城大学グローバル教育センターで購入した書写セット(小学校で購入する一般的なセット)があったため、今回もそのセットを活用することとした。半紙は書写セットのみでは不足すると考え、1000枚入りの箱の購入を依頼した。併せて、受講者数分の古新聞(1人あたり朝刊1冊)の準備を依頼し、書いた後の半紙を各自で保管できるようにした。授業当日の使用教室については、下見して可動机2つを1人の受講者が利用する席配置にすることを確認した。

受講者について、あらかじめ書写・書道経験の有無や記名の仕方、自由課題の題材を知るために、Microsoft Teamsを利用した事前アンケートを実施した。尋ねたのは、以下の4問である。

2023 日本体験学習 書道 (事前アンケート)

授業準備のためにいくつか質問に答えてください。なお、ここでの回答や授業中の様子は、教育や研究のために記録をとります。記録は個人を特定できないように管理、使用しますのでよろしくお願ひします。

Please answer questions for preparing the lecture. I will keep your answers and the lecture activities for education and research. I will manage and use the data without personal information. Thank you for your cooperation.

Q1 カタカナ表記の名前を教えてください。(日本で普段呼ばれている名前)

Please write your name in "katakana" (How are you called in Japan).

Q2 書道の経験はありますか。

Have you had any experience of Japanese calligraphy?

Q2-2 書道を経験した人は、どのくらいの経験期間でしたか。

(If you choice “Yes”) How long did you experience in Japanese calligraphy?

Q3 当日、全員で取り組む共通課題のほかに、1つ題材を自由に選んでください。ただし、紙の大きさは半紙のため、文字数が増えると難しくなります。

例) 「龍」「水戸」「和敬清寂」
 「人間は考える葦である」「夕焼け小焼けの赤とんぼ」

In the lecture, we will have a common subject. In addition to the common subject, you can try other subjects to write as well. Please write a phrase in Japanese words. Paper size is “hanshi” (a little bigger than A4 paper). It will be harder if you choose a phrase with many words.

e. g.) 「龍」(ryu, dragon) 「水戸」(mito, city name)
 「和敬清寂」(wakeiseijaku, spirit of sado(茶道))
 「人間は考える葦である」(Philosopher’s phrase, Man is a thinking reed.)
 「夕焼け小焼けの赤とんぼ」(One phrase in the Japanese autumn nursery song)

以上4問の結果をまとめたのが以下の表である。英語コースと日本語コースの21人を合わせて集計している。なお、個人が特定できないようQ1の回答を掲載しないなどの考慮をしている。漢字文化圏¹⁾の出身かどうかは、およそ半数ずつとわかった。書道の経験がある人の出身の内訳は、圏外2人、圏内3人、不明1人であり、圏内出身者に経験者が多いというわけでもなかった。また、書道の経験があると答えた人たちは、1日～数日の経験にとどまるため、今回の受講者は書写・書道の初学者と考えると差し支えないことがわかった。自由課題²⁾は前もって手本を書いて、授業当日に配布することとした。

表1 事前アンケートの結果

漢字文化圏の出身かどうか	圏内 11人	圏外 9人	不明 1人
書道の経験	有り 6人	経験の期間	“one day” 5人
	無し 15人		“a few days” 1人
自由課題	花、愛、夜、宝、夢、蟹、太陽(2人)、夜桜、平和、幸福、名人、茨城、水戸、一期一会、和敬清寂(2人)、不撓不屈、格物致知、雨にも負けず、水のようになる		

2 授業当日の動き

先述の授業目的から、具体的な授業として以下の表の工程を計画し実践した。使用教室付近には複数人が同時に使用できる水場がないため、授業後の片づけは私と授業担当教員、グローバル教育センタースタッフで行った。そのことを考慮した2校時(3時間)に収まる時間配分を計画した。

授業を開始し、まずは簡単な自己紹介³⁾を行った。その後、書道道具の説明、書くときの姿勢や墨量の説明、「永」の字を書く姿を見せるところまでを終え、共通課題「永」の試し書きに取り組ん

だ。なお、今回は、固形墨は紹介にとどめ、墨汁を利用することとした。また、書写セットの硯はプラスチック製であったため、石製の硯を持参し回覧することで、実際の質感や重さを体験してもらった。

表2 授業工程

時間	内容
授業前	各座席に書写セット、新聞、共通課題「永」の手本を置いておく。
15分	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単な講師紹介 ・書道道具の説明 <ul style="list-style-type: none"> ・各自、書道セットを開き、道具を配置する。 ・書くときの姿勢や墨量の説明 <ul style="list-style-type: none"> ・「永」の字を書く姿を見せる。
15分	<ul style="list-style-type: none"> ・各自、共通課題「永」を1枚書いてみる。(試し書き) <ul style="list-style-type: none"> ・記名についても伝える。 ・最初の1枚を保管するように伝える。 ・大きく失敗した場合などは、2, 3枚書いてもよい。
30分	講義タイム <ul style="list-style-type: none"> ・中国における書道の略歴、日本における書道の略歴を説明 ・甲骨文以降の漢字の誕生 ・漢字の書体変遷 ・中国から日本に書道伝来 ・漢字から仮名や片仮名が生まれたこと ・現在の芸術としての書道について
10分	質問と小休憩
40分	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字を書く要点を共通課題で説明 実践タイム <ul style="list-style-type: none"> ・自由課題の手本の配布 ・共通課題を5～10枚ほど書いた後、自由課題に取り組むことを促す。 ・共通課題に集中しても構わない。
30分	鑑賞タイム <ul style="list-style-type: none"> ・共通課題と自由課題を鑑賞する。 <ul style="list-style-type: none"> ・共通課題は、最初に書いたものと後に書いたものを各自比べる。 ・自由課題は、書いた本人がクラス全体に見せて、書いた字についての説明と、感想をひとこと述べる。 ・自由課題について、講師（私）から以下の2つの観点からコメントをする。 <ul style="list-style-type: none"> ・書写：文字の読みやすさ、楷書の筆遣い について ・書道：性格の表れ、芸術性 について
授業後	Microsoft Forms を利用したふりかえり

共通課題「永」を試し書きする間、硯の墨量や筆につける墨量を机間巡視で確認した。半紙の中心を把握するために、半紙を折っても構わないことを補足した。それでも、半紙の上部に偏って書く受講者が数人いたため、中心に大きく書いて構わないことを伝えた。



図1 書道道具の説明に使用した授業スライド

試し書きを終えた後、約 30 分間の講義を行った。中国における書道の略歴では、甲骨文字以降の漢字の誕生までの経緯、その後の書体の変遷を説明し、漢字や書道が、日本発祥の文字や文化ではないことを伝えた。日本における書道の略歴では、日本に漢字が持ち込まれる経緯やカタカナや平仮名の誕生、文字の普及の過程について説明し、カタカナや平仮名は日本独自の文字や文化であることを伝えた。その後、現在の芸術としての書道について、大きくは、漢字・かな・近代詩文書・篆刻・その他の分野があることを説明した。

History of Japanese Calligraphy

- History of Japanese letter

Date	Historical Events	How to use in the Era
57 A.D.	金印 (kin-in) gold official stamp from China dynasty	Japanese people didn't use the letter. (Maybe they didn't know the meaning.)
400s ~	万葉仮名 (man-yo-gana) It translated Japanese voice into the kanji(隸書).	Japanese people didn't use the own letter. (Ordinary people didn't use the letter.)
538	Buddhism introduction from Korea Buddhist scriptures were written by kanji.	Buddhist priests learned the kanji. Public servant used for official document.
800s ~	カタカナ (kata-kana) Buddhist priests made カタカナ for read scriptures.	Many people could read the kanji by カタカナ.
900s ~	ひらがな (hira-gana) Original letter was made from 万葉仮名(kanji(草書)).	Kanji was used for official document. ひらがな was used for literary works.
1700s ~	Ordinary people studied the letter at 寺子屋(terako-ya).	寺子屋 was learning space in Edo era.

図2 日本における書道の略歴の説明に使用した授業スライド (一部)

小休憩をはさんだ後、共通課題「永」には漢字を書くための点画が8種類含まれていることを説明し、「永」の所持技術が向上すれば、あらゆる漢字を書きやすくなると説明した。その後、以下のスライドを使用して、①見た目のバランス（横画は細く、縦画は太く書くこと、四角形や三角形などの図形に収まるイメージをもつこと）、②止めの動き、一定の動きの繰り返し、③次の書き順を意識する筆脈の3点を実演しつつ説明した。

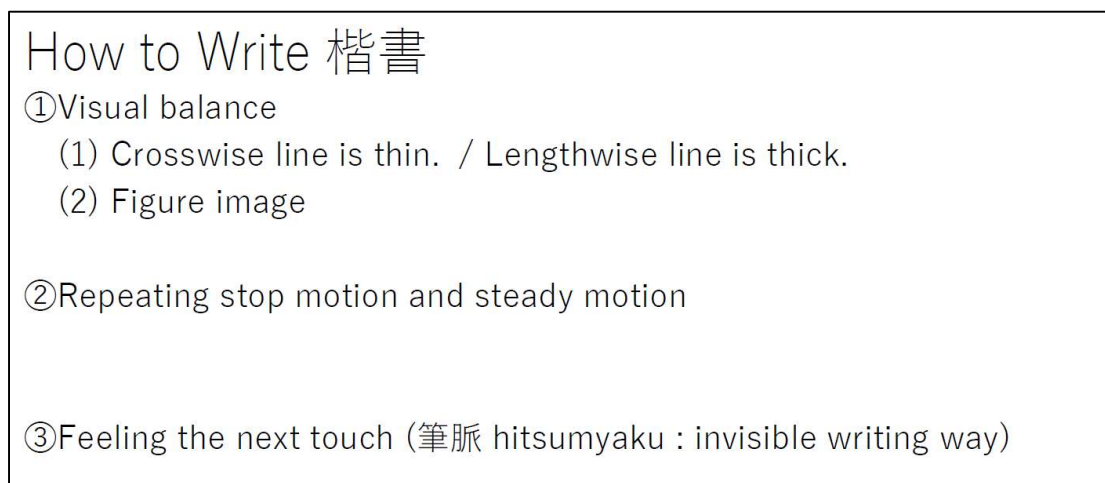


図3 漢字を書く要点の説明に使用した授業スライド（一部）

そして、各自の共通課題「永」や自由課題に取り組む実践タイムを約40分とった。机間巡視をして、書字のアドバイスや書き順の確認などをしつつ、一部の受講者の手本リクエストに応えた。受講者の中には、「石川啄木」「人間失格」など知っている言葉を自由に書く姿もみられた。

最後に鑑賞タイムをとり、共通課題「永」の試し書きと説明を聞いた後の書字の比較を個人で行い、教育研究のための作品撮影の許可をもらった。自由課題については、書いた本人がクラス全体に見せて、書いた字についての説明と、感想をひとこと述べる活動を行った。それぞれの作品について、私から書写の観点（文字の読みやすさ、楷書の筆遣い）と書道の観点（性格の表れ、芸術性）からコメントをした。例えば、筆の穂先が割れた状態で書かれた作品については、書写として、楷書としては穂先をそろえて書くことが望ましい一方、芸術の書道としてはあえてそう書くこともあると伝えた。作品鑑賞を書写と書道の両方の観点からコメントすることで、書写と書道の違いの理解を進めることや、単に正しい書字をすればいいというわけでもない奥深さに触れることを目指した。

3 試し書きと講義タイム後の書字の比較

授業当日に書かれた18人の共通課題（授業に遅刻してきた受講者や「永」の保管がうまくいかなかった受講者の3人分を除いた）を比較していく。書写の観点から点画、全体のバランスに注目し、明らかに向上、向上、同程度の3つに大別した。この区分ごとの例示を以下の図で行っている。それぞれの図は、左側が試し書き、右側が講義タイム後の書字である。なお、それぞれの回答に事前アンケートをふまえた整理番号を付しておく⁴⁾。

・明らかに向上 3人



図4 (E2-経験無) の前後



図5 (J2-経験無) の前後

・向上 7人



図6 (E1-経験無) の前後



図7 (J9-経験有) の前後

・同程度 8人

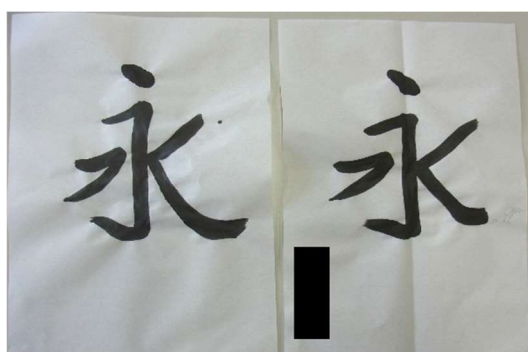


図8 (E10-経験無) の前後



図9 (J10-経験無) の前後

明らかに向上、向上の10人は、漢字を書く要点の説明をある程度理解し、実践した様子がみられる共通課題の作品となった。明らかに向上の3人は、点画や全体のバランスの大幅な改善がみられたため、説明の理解と実践の接続がうまくいったと考えられる。向上の7人は、点画や全体のバランスにある程度の改善がみられたため、説明の理解と実践の接続が部分的にうまくいったと考えら

れる。同程度の8人は、特定の部分に焦点をあてれば改善があるものの、全体的には前後の差が大きくないとみたため、説明の理解と実践の接続がうまくいかなかったと考えられる。

4 授業実施後のふりかえり課題の結果

受講者が今回の授業についてどのように受けとめたのか、Microsoft Teams を利用した事後アンケートを実施した。尋ねたのは、以下の4問である（回答者：19人）。続いて、問いの順に受講者の回答⁵⁾を挙げていくことで、授業理解や受けとめ方の把握をしていく。

2023 日本体験学習 書道（事後アンケート）

授業後のふりかえり

この授業を通して浮かんできた思いや考えについて回答してください。なお、ここでの回答や授業中の様子は、教育や研究のために記録をとります。記録は個人を特定できないように管理、使用しますのでよろしくをお願いします。

Looking back

Please write your feeling or thinking through the lecture. We will record about your answers and the lecture activities for education and research. We manage and use recording data without personal information. Thank you for your cooperation.

Q1 書道について思いや考えは浮かびましたか。

How did you feel or think about Japanese calligraphy?

Q2 日本語を書くことについて変化はありましたか。

Are there any changes about writing Japanese?

Q3 文字や芸術、文化について思いや考えは浮かびましたか。

How do you feel or think about letter, art, and culture?

Q4 その他、何かあれば書いてください。

If you have any comments or questions, please write freely.

4-1 書道に対する質問の結果

まずは、Q1「書道について思いや考えは浮かびましたか。」について、体験の感想、書字技術の所感、文化としての言及、精神性への言及に大別してみていく。書写・書道体験について、素直な感想を述べた回答が約半数の9人となった。あとの約半数のうち、書字技術に着目した回答が2人、書写・書道文化に着目した回答が4人、書道の精神性に着目した回答が4人となった。

Q1-1 体験の感想 9人

- ・it was really fun and once you get the core concept of it, it makes you want to do it more (E1-経験無)
- ・難しいですが、とても面白かったです。勉強になりました。(J4-経験無)

Q1-2 書字技術の所感 2人

- ・一画一画に集中しながら文を書く経験が新しく、だんだん完成度が高くなる字のおかげで達成感
ができた (E2-経験無)
- ・書道をして力の入れ方がとても難しいことを分かるようになりました。とても面白かったので
できれば自国に戻っても一人で時々練習してみたいと思いました。(J2-経験無)⁶⁾

Q1-3 文化としての言及 4人

- ・ Japanese Calligraphy is the art of writing by hand using ink and brush. it is a beautiful
art form as well as a mean communication. (E8-経験無)
- ・書道は日本の伝統文化です。同じ文字でも強さやしなやかさ、太さ等の違いが生まれ、その文字
の整い具合や、筆の運び方、墨の濃淡、全体の配置の美しさ、そしてその文字の持つ意味といっ
た観点で鑑賞します。(J6-経験有)

Q1-4 精神性への言及 4人

- ・ I did not expect it to take that much focus and mental capability. (E4-経験有)
- ・ 実際したのは初めてですが、思ったより難しく、神聖な事だと思いました。(J3-経験無)

4-2 日本語の書字に対する質問の結果

次に、Q2「日本語を書くことについて変化はありましたか。」について、変化の実感あり、変化の実感なし、書道の特徴に言及(質問と未対応)、その他の質問と未対応の4つに大別してみていく。この質問は、書写・書道に限らない普段の日本語を書く場面全般を思い浮かべて回答してもらうために設問した。そのため、変化のある／なしを回答した12人は、設問の文意に対応した回答だと考えられる。一方、書道に限った回答や授業内容を述べた回答などは、設問の文意に対応していないと考えられる。

Q2-1 変化の実感あり 8人

- ・ maybe a little, probably just the way i write kanji are now slightly different (E1-
経験無)
- ・ I knew the stroke order was important but now I understand why it is so important.
(E4-経験有)

Q2-2 変化の実感なし 4人

- ・ I don't think there are too many changes about the Japanese writing (E8-経験無)
- ・ ないと思いますが、筆順はもっと気になるかもしれません。(J8-経験無)

Q2-3 書道の特徴に言及(質問と未対応) 4人

- ・ During calligraphy there is because there is more intention behind stokes (E5-経験無)

- ・日本語で書道を書くにはいくつかの異なる文体がありますが、それぞれの文体には独自の美しさがあり、通常の日本語で書くよりも注意深く丁寧に書く必要があると思います。(E11-経験有)

Q2-4 その他の質問と未対応 3人

- ・文字の書体は、以下の三種類があります。楷書〔かいしよ〕…一点一画をくずさず、きちんと書く書き方。行書〔ぎょうしよ〕…楷書の点・画をくずした書き方。草書〔そうしよ〕…行書をさらに崩し、点・画を略した文字 (J6-経験有)

4-3 文化や芸術に対する質問の結果

次に、Q3「文字や芸術、文化について思いや考えは浮かびましたか。」について、感想、集中力について、日本について、俯瞰的な視点に大別してみていく。この質問は、日本語に限らない文字文化や芸術について広範囲の対象を思い浮かべて回答してもらうために設問した。他の文化との比較や抽象度の高い回答を求められていると受け取られる質問であるため、留学生にとっては難しかったことが予想される。素直な感想の回答が7人、集中力や日本に話の中心を置いた回答が6人となった。一方、国と文化の関係や文字に対する認識の変化などを述べる回答（質問と対応している回答）は6人であった。

Q3-1 感想 7人

- ・I think it is very interesting and unique (E5-経験無)
- ・初めて書道に挑戦したので、とても嬉しかったです。今度試してみたいです (E7-経験無)

Q3-2 集中力について 3人

- ・日本の文化は落ち着いた感じで集中力がたくさん必要だ。まっすぐな感じ (E2-経験無)
- ・I think the quiet focus necessary for doing good work was a much larger part than originally thought (E6-経験無)

Q3-3 日本について 3人

- ・これは日本の美しい文化です。誰もがこの文化を知ることができるように、大学で教えるべきだと思います。特徴を通して人間の特徴を知ることができます。これはとても面白いです。(J4-経験無)
- ・日本の伝統文化・芸術に触れながら書を書くことで、知性や感性が養われることはもちろん、姿勢や立ち振る舞いも美しくなるでしょう。(J6-経験有)

Q3-4 俯瞰的な視点 6人

- ・In my opinion, anything can be art. And so do culture. Letter is a measure of sending our message. But People have tried to write down the letter as neatly as they could and It becomes bigger and bigger. Finally reached out to culture. (J1-経験無)
- ・文字は人類の歴史を記録するものだと考えましたが、今回の授業を通じて、文字も芸術の一種だ

と感じました。(J10-経験無)

4-4 授業全体に対する質問の結果

最後に、Q4「その他、何かあれば書いてください。」について、授業の様子や受けとめ方を知る参考として、回答を書いた6人分を紹介しておく。

- ・楽しくて有益な経験でした！(E2-経験無)
- ・自国に戻っても一人で練習してみようと思うことになりました。とても楽しい経験でした。(J2-経験無)
- ・これからは書道についてもっと学び、家で書く練習をしていきます。(J4-経験無)
- ・I like the process of writing Japanese calligraphy that requires focus and calmness. Because with ourselves focused and calm, then each stroke and content of the calligraphy is very meaningful, especially if we are writing a poem in it. (E9-経験無)
- ・この体験授業とても楽しかったです！(J7-経験無)
- ・普段はあまりそういう機会がないので、本当に貴重な経験をもらいました。(J8-経験無)

III 考察と今後の課題

1 考察

本稿で取り上げた授業実践においては、漢字文化圏の出身かどうかや、書写・書道経験の有無による書字技術の差異があまりみられなかった。おそらく、日本以外の漢字文化圏における書写・書道教育のあり方を反映していることが予想される。そのことは、書写・書道経験のある受講者が1日から数日程度の経験にとどまっていることから垣間見える。そこで、本稿では、授業目的との対応に焦点をあてて授業実践の結果をふまえた考察を行う。

1-1 (1)「体験を通して、書字技術を向上する。」について

書写・書道における書字技術については、試し書きと講義タイム後の書字の比較結果から、10人(18人中、約55%)が向上したことが確認できた。あとの8人(18人中、約44%)は同程度であったため、1回の授業実践で技術向上する限界を示している可能性がある。事後アンケートにおけるQ1-2(書字技術の所感)の回答にあるように「力の入れ方」が難しかったという回答がいくつかあったことから、筆を持つ手や穂先に伝わる力について説明することで、書写・書道における書字技術がより広く向上すると予想される。

書写・書道に限らない日本語の書字技術については、事後アンケートにおけるQ2(日本語を書く変化について尋ねたもの)の回答群より、変化の実感のあった8人(19人中、約42%)に(程度の差があるものの)向上したことが確認できた。一方、4人(19人中、約21%)は変化を実感していないと回答しており、1回の授業実践で技術向上する限界を示している可能性がある。ただ、変化を実感していない4人における試し書きの変化の内訳は、明らかに向上が2人、同程度が2人であ

る。明らかに向上の2人については、書写・書道における書字技術の向上を考慮すると、普段の日本語の書字技術にも変化がありそうだが、その変化を認識していないという可能性が考えられる。これらの可能性より、書写・書道体験の後に鉛筆等の筆記用具で書字活動をすれば、日本語の書字技術の変化に気づく割合が増えることが予想される。

1-2 (2)「文化の知識(歴史や芸術)を通して、日本文化理解を深める。」について

日本文化理解を深めたのかどうかについて、上述(1)で取り上げた書字技術の向上を含める考え方もありうるが、本稿では日本文化への言及をしたかどうかで把握しておく。具体的には、事後アンケートのQ1-3(文化としての言及)やQ1-4(精神性への言及)、Q3-2(集中力について)やQ3-3(日本について)の回答から把握することができた。これらの回答者を重複なく数え上げると12人(19人中、約63%)であった。事後アンケートから把握できる言語化された対象にしぼっても、6割以上の受講者が一定程度の日本文化理解を深めたと考えられる。

1-3 (3)「書いた作品を鑑賞することで、文字や芸術の認識を広げる。」について

文字や芸術の認識を広げたのかどうかについて、芸術としての書道の概略説明や、受講者の作人に対して書写の観点(文字の読みやすさ、楷書の筆遣い)と書道の観点(性格の表れ、芸術性)からコメントをしたことで、受講者全員に文字や芸術の認識を広げる授業実践を行った。1回の授業実践のなかで文字や芸術の認識を広げることは、抽象度の高いことを考慮すれば困難であることは当初から予想できていた。それでも、Q3-4(俯瞰的な視点)の6人(19人中、約31%)の回答からは、ある程度の認識の広がりをよみとることができた。

1-4 全体を通じた考察

以上の考察により、短期で行う留学生向けの書写・書道体験の学習効果と限界を一例として示した。書写・書道の書字体験、書写・書道の文化理解、書写・書道の鑑賞の3つの要素で授業を構成することで、短期の体験であっても、受講者の理解度に合わせた学習効果が受講者の作品や認識(を反映した事後アンケート)から把握することができた。多文化共生や多文化理解における書写・書道教育研究に対して、一事例を提供できたと考えている。

2 今後の課題

今後の課題として、2点述べておく。1点目は、本稿の授業実践は2回にとどまっているため、結果で示した受講者の割合などは参考程度にとどまっている。そのため、引き続き授業実践を継続していくことで、統計的な精度を高めたり、受講者の多様性をより反映させたりしていく必要がある。考察1-1でふれた改善にかかわる予想をふまえて取り組んでいきたい。

2点目は、書写・書道体験そのものの学習効果とは別様の影響を考慮する必要がある点である。濱田(2019)は、留学生のコメントペーパーを分析する立場から、書道の授業に対するコメントを多く取り上げて分析している。こうした、受講者のコメント分析の観点から見出されるのは、留学生の日本語能力や、バトラー(2011)の論じた学習言語としての言語運用能力の影響である。本稿においては、事後アンケートにおける素直な感想の回答や、質問と未対応の回答にとどまっている

ケースとして表れている。これらの課題については、別稿で論じていきたい。

注

- 1) 本稿における漢字文化圏は、比較的広域の解釈で使用しており、中国、韓国、ベトナムなどを含む範囲としている。
- 2) 1人は「難しくても大丈夫」と回答していた。この言葉を書くという意味ではなく、意気込みを書いたものと解釈して、今回の表からは外している。(授業当日に本人にも確認した。)
- 3) 社会学(地域社会学、教育社会学)や教育学(生涯学習、社会教育)の専門であるが、書道の経験があるため、今回の授業担当となった。書道は幼少期からの稽古を継続しており、所属団体からは師範の認定を受けている。また、大学院(修士課程)において、書写・書道の授業を受講した経験もある。
- 4) 例えば、「E15-経験無」は、英語コースの整理番号15番で書写・書道経験無し、「J20-経験有」は、日本語コースの整理番号20番で書道経験有りを意味する。
- 5) 受講者の回答には、誤字や文法上の間違いが含まれているが、そのまま掲載している。
- 6) 具体的な国名が記されていたが、念のため「自国」と変更した。

引用文献

- 馬場裕子「日本文化としての書道につながる感じ語彙指導」『間谷論集』15, 大阪大学日本語日本文化教育センター, 2021, 111-122.
- バトラー後藤裕子, 2011, 『学習言語とは何か』(三省堂).
- 福光敬子「留学生を対象にした書道授業の報告」『授業研究』18, 大阪大学日本語日本文化教育センター, 2020, 33-54.
- 濱田美和「学部留学生が書いた講義コメントの分析」『富山大学国際機構紀要』, 富山大学国際機構, 2019, 1-13.
- 林朝子「留学生の書道体験における気づき」『三重大学国際交流センター紀要』12, 三重大学国際交流センター, 2017, 127-139.
- 押木秀樹, 2016, 「手書き文字の未来のために」『書写書道教育研究』30, 全国大学書写書道教育学会, 104-110.
- 押木秀樹, 2017, 「文字を書くことの学習における字形の多様さの価値と望ましさ」『書写書道教育研究』31, 全国大学書写書道教育学会, 60-63.